

第五問

「ここでいいか？」

「うん、ありがとう。怜次！んで、話なんだけど」

離れた場所に来ると立ち止って怜次が振り返って聞く。

「試召戦争をしたいんだろう？」

「え、なんでわかるの！？」

怜次がニヤリと笑って言う。明久は驚きながら言った。

まだ、何も言っていないのにわかることになんか驚いている様子だ。

「わかるさ。お前と冬久は幼なじみの為に教室を変えたってこともな」

「「な、なんでそれを！！？」」

怜次が笑って言う。明久と冬久は驚きながら叫んだ。

「アキ兄、フユ兄。わかりやすすぎだもん」

「せやな。顔にでてるからすぐにわかるし」

真希と巧は笑って言った。

「話が脱線したが。試召戦争は俺も起こそうと思ってた」

「え、そうなの？もしかして、ありすちゃんの為？」

怜次が言っていると明久は小首を傾げて聞くと怜次は頷いた。

「他の皆を巻き込むことには辛いけど、やるしかないからな」

「申請しても却下とかされそうだもんね」

ふうとため息をついた怜次が言っていると明久が苦笑いして言った。
いくら従兄弟の甥の頼みでも聞いてはくれなさそうなのはわかっているのだろう。

「Aクラスの設備も凄かったよね」

「もうホテルみたいだったしな」

真希が言っていると辰也が頷いて言った。

「あ、そろそろ。もどらへん？」

「そうだな、先生が来てるみたいだし」

巧が言うと冬久も頷いて全員で教室に入っていく。
そして、再び自己紹介がはじまる。

「えー、須川亮です。趣味は……」

須川の自己紹介が終わると

「Ｆクラスの副代表の坂本雄二だ。俺のことは、ま、坂本でも代表でも、好きに呼んでくれ
後、ありすと雪菜に手を出した奴は俺と紅葉でしばらくからよろしくな」

そう言うと言った。

ちゃっかり脅しもつけている所が雄二らしい。

「最後にＦクラス代表の新条君。君の自己紹介をして下さい」

「了解」

答えて怜次は立ち上がり、ゆつくりと前に出た。
その雰囲気、Ｆクラス中の視線が集まる。

「Ｆクラス代表の新条怜次だ。俺のことは代表か名前で読んでくれ

ればそれでいい」

そう言うところで、少し……間を空けた。間の開け方が上手いやり方だ。

「さて……みんなにひとつ聞きたい」

言いながら皆と視線を合わせる。

そして、流れるように教室各所に視線を移していくと、みんなの視線も自然とそれを追っていた。

カビ臭く、すき間風が通る教室。

古く、うす汚れて綿もスカスカな座布団。

汚れた上に、脚もガタガタな卓袱台。

最後に皆を見据えると口を開いた。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが……」

ひと呼吸置くと、確認するように告げる。

「不満はないか？」

『『『大アリじゃあっ！！！！』』』』

教室を揺るがす、魂の叫びだ。

「だろう？ 俺だって不満だ。このクラスの代表として、大いに問題意識を抱いている」

怜次は仰々しく同意する。すると、あちらこちらから不満の声があがり始めた。

『いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する！』

『そもそもAクラスだっておなじ学費のはずだ！ あまりにも差が大きすぎる！』

『そうだそうだ！』

それらをまとめ、引き継ぐように怜次は口を開いた。

「みんなの意見はもつともだ。そこで、これは俺の代表としての提案なんだが」

自信たっぷり、素晴らしいほど綺麗な笑顔で、言い放つ。

「Fクラスは、Aクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

彼、新条怜次は戦争の引き金を引いたのであった。

バカテスト 第五問

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。
『光は波であって、（ ）である』

姫路瑞希と雨宮つぐみと支倉ひばりと月野造の答え
『粒子』

教師のコメント
『よくできました。』

土屋康太の答え
『寄せては返すの』

教師のコメント
『君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。』

吉井明久の答え
『勇者の武器』

教師のコメント
『先生もRPGは好きです。』

新条ありすの答え
『闇と対なる』

教師のコメント

『ファンタジーな問題ではありません。
というよりわざと珍回答をしていますか？』

坂本雄二の答え

『眩しいもの』

教師のコメント

『違います。』

坂本雪菜の答え

『サイコパワー』

教師のコメント

『先生も昔は懂れていました。』

秋月終夜の答え

『殺人ビーム』

教師のコメント

『真面目にやってください』

吉井冬久の答え

『心である』

教師のコメント

『周りに合わせて珍回答は止めてください』

吉井真希の答え

『真心である』

教師のコメント

『良いことを言って終わらせようとししないでください』

風宮紅葉の答え

『微粒子』

教師のコメント

『わざとですか？』

第六問

紅葉 side

Aクラスへの宣戦布告。

それはこのFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えないよね

『勝てるわけ無いだろう』

『コレよりひどい設備なんてあり得ない』

『姫路さんがいれば何もいらない』

『真希ちゃんを抱きしめたい』

『雪菜ちゃん、らぶ!』

『ひばりたん、かわゆす』

『つぐみたん、嫁にきて!』

『紅葉ちゃんがいれば幸せだ』

『造ちゃんもいるなら本望だ!』

そんな悲鳴が教室内のいたるところから上がっています。

一部おかしなセリフも交じっていたが、気にしないようにしよう。
じゃないと落ち込むし。

確かに誰が見ても、AクラスとFクラスの戦力差は明らかなんだよね。

文月学園では、点数の上限がないテストが採用されているし。

一時間の制限時間内に、無制限にテスト問題を解いていくことができる。

テストの点数に上限はなく、能力次第でどこまでも成績を伸ばすことができるというわけ。

そして、科学とオカルトと偶然から生まれた、『試験召喚システム』これは、テストの点数に応じた強さを持つ。

『召喚獣』を呼び出して戦うことのできるシステムで、教師の立ち会いの下で行使が使用可能になる。

学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高める為に提案された先進的な試み。

その中心にあるのが、召喚獣を用いたクラス単位の戦争………試召戦争と呼ばれる戦い。

その戦争で重要なのがテストの点数だ。AクラスとFクラスの点数は文字道理桁が違うわけで。

正面からやりあっても、Aクラス一人に対してFクラス三人でも勝てるかどうかは分からないというわけなんだよね。

どうあがいても勝つことなど不可能としか思えないのですが、どうする気なのかな。

だが、怜次はそれを否定してみせるような言葉を発言しました。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、勝たせて見せるさ」

圧倒的な戦力差を知りながらも、怜次はそう宣言したのです。

『何をバカなことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

『そんなことより、真希ちゃんを愛でたい』

否定的な意見が飛び交うが、また、おかしい意見も出てきたよ。
いったい誰なのかな？

「根拠ならあるさ。このFクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

「要素？」

怜次が自信満々に笑つて言うと雪ちゃんが呟やいた。

「それを今から説明してやるよ」

得意の不敵な笑みを浮かべ、壇上から皆を見下ろす怜次。
ゆーくと違い、どこか自信にあふれた感じがする

「おい康太。畳に顔つけて姫路達のスカートを覗いていないで、前
に出てこい」

「……………！！（ブンブン）」

「ひゃわっ」

「わわっ!？」

怜次に呼ばれた少年、土屋康太は必死に顔と手を横に振って否定した。

瑞希ちゃんと雪ちゃんが慌ててスカートを押さえて離れると、顔についた畳の痕を気にしながら壇上へと歩き出しました。

「土屋康太。こいつがあ有名な、寡黙なる性識者だ」
ムツリーニ

「……………!!(ブンブン)」

『ムツリーニ……………だ……………と?』

『ヤツがそうだというのか?バカな……………』

『だが見ろ。ああまで露骨な覗きの証拠を、未だに隠そうとしているぞ……………』

『ああ……………まったくだな。ムツリの名に恥じない姿だ……………』

畳の痕を手で押さえている姿が果てしなく哀れを誘う。

「「???」」

瑞希ちゃんと雪ちゃんだけが、訳が分からないという顔で首を傾げている。

いつまでも純粋な雪ちゃんदैいてね

「姫路は説明不要だろう。その実力はみんなが知っている通りだしな」

「えっ！ わ、私がですかっ？」

「ああ、ウチの主戦力だ。期待している」

突然に話をふられて慌てる瑞希ちゃん。

『ああ、そうだ。俺たちには姫路さんがいるじゃないか』

『たしかに彼女ならAクラスに引けをとらないな』

『まったくだ。彼女がいれば、ほかに何もいらなないな』

『真希たん、かわゆす!!』

『雪菜ちゃん、嫁に来て〜!!』

さきほどから、瑞希や真希ちゃんと雪ちゃんにラブコールを送る輩が増えているんだけど、どうしよう。

「木下秀吉だっている」

「む？ ワシか？」

『おお……!!』

『確かアイツ、ここにいる木下優子の……』

「当然、この俺も全力を尽くす」

『確かに何かやってくれそうな雰囲気があるよな』

『そういえば、新条って西多摩で有名な奴で小学生の頃から神童だ
って噂が』

『てことは、振り分け試験の時は体調不良かなんかだったのか』

『なんだよ、Aクラスレベルが3人もいるんじゃないか、このクラ
ス』

いけそうだ、やれそうだという雰囲気は教室内で満ちている。

「それに、Cクラス並の成績を持つ。吉井明久とBクラス並の成績
を持つ冬久だっている

後、月野造と山崎巧もいるしな」

ニヤリと笑ってそう言った

『真希ちゃんの義兄様達のことか！』

『真希ちゃんには劣るけど、成績が途中からあがったんだっけ』

『月野ちゃん、かわゆす！』

『山崎ってエロだと聞いたぞ？』

ざわざわとクラスメイトが騒いだ。

「それに明久達は《観察処分者》だ」

『それって、バカの代名詞じゃなかったか？』

「うーん、傍から言われるとそうなんだけど。ちょっとした騒動でなつたわけだから」

「だから、バカの代名詞という理論だけじゃないんですよ」

真希ちゃんが笑顔で言う辺り、周りのざわめきが静かになった。

「あの、《観察処分者》というのはどういうものなんですか？」

手をあげて瑞希ちゃんが聞いた。

「具体的には教師共の雑用係だ。力仕事とかそういった類の雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合だ」

本来試験召喚獣は物に触ることが出来ないけど観察処分者である明久と冬久と巧と造のだけは特別使用。

「そうなんですか？それって凄いですね。

試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよね」

瑞希ちゃんは笑顔で言う。

「あはは。そんなたいしたもんじゃないんだよ。

教師の監視下でなければ呼び出せないし、試験召喚獣が受けた負担の何割かがフィードバックして返ってくるんだよ」

つまり重いものを明久の試験召喚獣に持たせて校舎内を走り回らせればその疲労が明久と冬久に返ってくるわけなんだよね。

『おいおい。《観察処分者》ってことは、試験戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ?』

『だよな。それならおいそれと召喚できないってことだよな』

確かに普通の《観察処分者》ならその通りですがしかし…

「おいおい、さっきも真希が言ってただろ? 明久の成績はCクラス並で冬久はBクラス並だ。

そんな明久と冬久がおいそれと簡単にやられると思うか? ましてや《観察処分者》なら他の奴よりも召喚獣の扱いに長けている。

《観察処分者》と高得点、この2つがあるから明久と冬久はクラス最強なんだ」

「怜次、あんまり褒めないでよ。照れちゃうよ」

「なんか、むずがゆい」

明久と冬久は照れているね。

「そして、（特別処分者）というのは知っているか？」

「確か、今年の成績はいいのに普段の生活態度が悪い奴にあたえられるという」

「そうだ。吉井真希はその称号を持っている。」

『なんだって！？』

『高成績でその称号を持つ奴がこのFクラスにいるとは！！』

ざわざわと騒がしくなる。そもそも特別処分者というのは観察処分者とかわからないんだけど。

違う点があるというなら、召喚獣に召喚者の意識が乗り移るみたいな感じになるんだ。

あ、本来の肉体も操作可能なんだって。

意識が二つにわかれて召喚獣と本来の肉体にも意識があるというしくみだね。

肉体が無防備だと万が一のこともあるからね

「まずは小手調べにDクラスを攻め落とす」

「みんな、今のこの境遇には我慢がならないだろう？」

『当たり前だ！！』

「ならばペンを執れ！ 出陣の支度を始めるぞ！」

『おおーっ！！！！』

「「お、おー……」」

周りに流されながら瑞希と雪ちゃんが腕を上げます。
僕も頑張ろうかな

第六問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

バカテスト 第六問

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希と新条ありすと吉井真希と雨宮つぐみの答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント

『簡単でしたかね。』

吉井冬久の答え

『 $C_6H_5NO_2$ 』

教師のコメント

『それはニトロベンゼンの化学式です。

名前にベンゼンが含まれている物を指したわけではありません。』

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

『君は化学をなめていますか。』

吉井明久の答え

『B・E・N・Z・E・N』

教師のコメント

『あとで土屋君と一緒に職員室に来るように。』

第七問

ひばり side

「ねえ、怜次」

「なんだ、明久」

アキ君が怜次君に声をかけているのが見えた。
どうかしたのかな？

「宣戦布告の使者は誰が行くの？」

「そんなのいいだっしぺの俺が行くんだよ」

アキ君の質問に怜次君は二カッと笑って答えた。

「でも、怜次だけで大丈夫なのか？」

「大丈夫だって、心配すんな」

今度はフユ君が怜次君に近寄って言う。

二人共親友には優しいんだよね。

「俺が行こうか？」

「いや、藤堂は姫路同様に切り札だから、使っわけにもいかない」

藤堂君が言うけど怜次君は首をふり、まっすぐ見つめて言う教室

を出て行く。

多分、Dクラスの方に向かったのだろう。

「自分も行きますよ〜?」

「造が行くなら、僕も!」

怜次君が出た後、月野君と芳乃ちゃんが慌てて怜次君を追いかけて行った。

ひばりside end

造side

無事、宣戦布告が済んで帰る途中

一緒に並んで歩いていたら。

ちっこい子が教室の前にいたんです。

身長は新条君の妹さんと同じくらいでしたね

新条君はその子を見て辛そうにしていました。

ちっこい子は新条君に微笑んでからスタスタと歩いて行きました。
いった誰だったのでしょうか?

「あ、あの。新条君はどうして、試召戦争をしようと思ったんですか?」

「……ありすと雄二の妹の為だな」

「しす…じゃなくて。妹想いだね」

自分は気になっていたことを聞くと新条君はすぐに答えてくれました。

途中、朋さんが小声で何か言っていましたけど。
何んて言ってたのでしょうか？

「後、明久と冬久は妹と島田や姫路。それと支倉と雨宮の為だと思
うぜ？」

俺も明久と冬久の気持ちはわかるつもりだしな」

「それはどうしてですか？」

「わかった！ひめちゃん身体が弱いばかりにFクラス入り、
みなちゃんは頑張ってここまで来たし、数学はAクラス入りしても
問題ないもんね

真希ちゃんとひばりんとつぐみんは調子が悪かったからだし。
それを考慮してるんだよ！」

新条君が笑って言うと言つて自分は不思議そうに聞くと突然、朋さんが声
をあげて呟いた。
なるほど、そう言われると納得できますね。

「レイさんと呼んでもかまいませんか？」

「あ？別にいいけど」

優しいリーダーのレイさんに出会えて自分は嬉しいです。
アキさんとフユさんにも出会えただけでも自分は幸せ者なんですよ
うね

しばらくして教室に戻ると

「あ、お帰り。怜次」

「傷はないようだな」

フユさんとアキさんが笑顔で出迎えてくれました。
どこかホッと安堵したような表情をしていますね。

「でも、怜次に怪我がなくて良かった気がする」

秋月君も安心したように言う。

あの、島田さんから黒いオーラーを感じるんですけど。
気づいてないんですか？

「心配しすぎだろ、お前等」

「だって…よ」

レイさんが苦笑いしながら言う。秋月君が少し悲しそうに言う。

「その話は終わり！とりあえず、屋上でミーティングだ。行くぞ」

レイさんはそう言う。とスタスタと教室を出て屋上に向かいました

造side end

つぐみside

屋上に通じる扉を開けてくぐると、太陽の下にでる。

雲ひとつない青空に、優しい春風が吹いた。

その春の日差しに、はためく瑞希ちゃんのスカートに注視する土屋君以外のメンバーは目を細める。

藤堂君は土屋君の襟首を掴んで何か会話してたけどね

「怜次、宣戦布告はしたんだよね？」

「ああ、今日の午後の開戦予定だ」

怜次君にアキ君が聞くと怜次君は頷いた。

「なら、先にご飯ですね」

月野君が笑顔で言うと怜次君は頷いてアキ君とフユくんを見る。

「そうなるな。しっかり腹ごしらえしとけよ？ 明久、冬久」

「「わかってるよ」」

アキ君とフユ君は怜次君に言われて苦笑いしながら答えた。

「アキくんとフユくんのお弁当はちゃんとあるよ」

ニツコリ笑って笑顔で言うと土屋君がアキ君を妬ましそうに見る。

「妬ましい……」

「なるほど。今までの弁当は、可愛い幼なじみのお手製か？」

「全部じゃないよ。僕や冬久や真希や巧も作ってるし」

「ほう、ということは明久と冬久と真希と巧もお弁当は作れるということじゃな」

秀吉君はアキ君とフユ君と真希ちゃんを見て言う。

アキ君達にゲームはあまり買わせないようにしている為、6人で日程を決めて弁当と食事当番を決めているのだ。

「わたしもお弁当を作りたいのですが、許可をもらってないので作れないんです」

「え？そうなの？」

しゅんと落ち込んだように瑞希ちゃんが言う。島田さんが不思議そうに聞いてきた。

「当然だろ。料理に薬品をいれるんだからな。今は舌がしびれるくらいだけだ」

「マジ？」

藤堂君は呆れながらそう言つと怜次君が苦笑いしながらアキ君に尋ねた

「うん、一度だけ、姫路さんのお弁当食べたら、病院に入院してたんだ」

「それから、瑞希ちゃんにはちゃんとしたお弁当が作れるまでは禁止にしたんだよ」

あたしはため息を吐きながら言うと怜次君と雄二君と秀吉君と土屋君と島田さんは青ざめていた。

「ということはまた練習するんだよね」

「うん、まだまだ、だからね。」

「ウチも参加していい？」

「僕も！」

「いいよ？みんなで料理教室しよう」

ひばりちゃんは笑顔で言うと島田さんと瑞希ちゃんと真希ちゃんも嬉しそうに笑った。

「明日が楽しみだね」

「うむ、そうじゃのう」

「明日はごちそうだな」

「楽しみや」

男性陣も嬉しそうに笑っている。

「この件は後にして試召戦争の話に戻ろう」

この場にいる全員は雄二君を見る。
ただ、ありすちゃんを膝枕をしての会話はやめた方がいいよ

「怜次。一つ、気になっていたんじやが、どうしてDクラスなんじや？」

段階を踏むならEクラス。勝負にでるなら直接Aクラスじゃろう？」

「そついえば確かにそうですね」

「まあな。当然考えあつてのことだ」

怜次君が鷹揚にうなづく。

「どんな考えなんですか？」

「色々と理由があるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。

戦うまでもない相手だからだ」

「え？ でも、クラスは僕らより上だよ？」

「振り分け試験時点ではそうだったかもしれない。だが、実際はちがう。

明久、いまおまえの目の前にいるメンツをよく見る」

「えーっと……」

アキ君は雄二君に言われた通りに周りのメンバーを見る。

「美少女が4人と美少女が4人とバカが1人とムツツリが1人とドアホが一人いるね」

「「酷いよ！アキくん！あたし達はそんなにちっちゃくないよ！」」

「アキさん、自分は男ですよ！？」

「誰が美少女だと！？」

「落ち着いて、つぐみにひばり！てか、なんで雄二が美少女に反応するのさ！？」

しかも、造まで」

「……………（ポツ）」

「俺が美少女やて！？」

「ムツツリーニや巧まで！？どうしよう、僕だけじゃツツコミ切れない！」

と、アキ君が慌てていると朋ちゃんがキツパリと言った。

「坂本はバカで美波と瑞希と僕と秀吉が美少女で土屋はムツツリだよ造は男の娘」

シーン

「そ、そうか」

「ありがとう。芳乃さん」

「いえいえ」

笑顔で笑っていた。

「ま、まあ、要するにだ。姫路に問題がない以上、正面からやりあってもEクラスには勝てる。

俺たちの目標は、あくまでもAクラス。Eクラスとやり合っても、得るものは無い。
だったらやる必要はないだろ？」

「Dクラスとやり合う事に意味があるということ？」

「その通りだ。ま、初陣でもあるし。派手にやって今後の景気づけにしたいからな。

それに、さっき言いかけた打倒Aクラスの作戦に役立つプロセスだしな」

「あ、あのー！」

すると、不意に瑞希が大きな声をあげた。

「ん？　なんだ姫路」

「新条君たちは、前から試召戦争について話し合っていたんですか？」

「ああ、それか。じつはありすや雪菜や姫路や島田や雨宮と支倉の

為だな」

「そうなんですか」

瑞希ちゃんが不思議そうに聞くと怜次君は笑顔で答えた。

「さっきの話、Dクラスに勝てなきゃ意味がないと思うけど？」

「勝つんだよ。俺達みんなの力で」

アキ君の心配を笑い飛ばしてメンバーを見渡す。

「おまえ等が俺に協力してくれれば、必ず勝てる」

怜次君は力強い言葉で言った。

「いいか、おまえら。ウチのクラスは……最強だ」

根拠のない言葉だが、なぜかその気になるという雄二君の言葉にはそんな力があつた。

「いいわね……面白そうじゃない！」

「なんかやれそうだって気になるね」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「頑張るぞ！」

「……………（グッ）」

「頑張ろうね！みんな！」

「が、頑張りますっ！！」

「自分も頑張ります！」

そう皆がいい、士気が上がる。

「そうか。それじゃ、作戦を説明する」

そう言い、Fクラスの勝つ為の作戦が説明される。

第七問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

バカテスト 第七問

問 以下の問いに答えなさい。

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希&吉井真希の答え

『good—better—best
bad—worse—worst』

教師のコメント

『その通りです。』

吉井明久&吉井冬久の答え

『good—gooder—goodest』

教師のコメント

『まともな間違え方で先生驚いています。』

goodやbadの比較級と最上級は語尾に—erや—estをつ
けるだけではダメです。

覚えておきましょう。』

土屋康太の答え

『bad—butter—bust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

坂本雪菜の答え

『good—better—best』

教師のコメント

『一つはできましたがもう一つは思いつかなかったみたいです』

新条ありすの答え

『good』

英語なんかできなくて大丈夫です！

教師のコメント

『いや、必要になりますからね！？』

第八問（前書き）

今回は終夜視点です！

第八問

終夜side

「アキ、冬久、終夜、真希！ 木下たちがDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」

ポニーテールを揺らして走ってきたのは俺の幼なじみである島田美波。

やっぱり、可愛いよな……美波

「おーい！終夜、ぼんやりと島田さんを見つめない！」

「そうだぞ、あまりにはずかしすぎで俺達の後ろに隠れたじゃないか」

「せーかくにはわたしと巧君の後ろですけどね」

明久に言われてはっと我にかえると本当に恥ずかしそうに赤面した美波が真希と巧の後ろにいた。

「わ、悪い！」

「べ、別にいいけどね」

俺が慌てて謝るとそっぽ向いて美波が呟いた。
だから、その反応が可愛すぎるんだって！！

「どう思う、アキ兄」

「いや、見ていてほのぼする展開だね」

「終夜も男なら押し倒すんや！」

「いや、それはどうかと思いますよ。巧君」

冬久がニヤニヤと笑って言う。と明久もニヤニヤと笑って言い、巧ま
でニヤニヤ笑いになっていた。

真希が呆れながらツツコミをいれたけどな
どこからハリセンを出したんだろうか？

「そ、それよりも！ 試召戦争に集中しないと！」

美波があわあわと慌てて明久達に言う。

ありがとう、美波。本当に優しいな

「美波ちゃんがそう言ってるんですから、作戦開始ですよ？」

真希も美波を後押しするように言う。

前線では、秀吉率いるFクラス先遣隊が戦端を開いており、俺たち
からも、

展開されたフィールドに召喚獣が召喚される様が見えた。

俺達は渡り廊下とFクラス中間点、Eクラス近辺に中堅部隊を展開
している。

と、鉄人の姿が見えた。

『戦死者は補習だ！』

『ヒ、ヒイツ?! て、鉄人?! イ、イヤだ! 補習室だけはっ
!』

鉄人の出現に生徒Aは怯えていた。

『黙れ! 負け犬が!』

戦死して捕虜になった者は、今日の戦争が終了するまで、補習室で特別講義を受けさせてやる!

終戦まで何時間かかるかはわからんが、たっぷり指導してやるぞ?』

『あ、あんな拷問、耐えられるわけが……』

鉄人が凄く楽しそうに言うともまだ怯えたままの生徒Aが青ざめたままの表情で言う。

『拷問? そんなことはせん』

そう言つて鉄人がニヤリと笑う。

『補習が終わる頃には、趣味は勉強。尊敬する人物は二宮金次郎という具合に、

理想的な生徒に改ぞ……仕立てあげてやろう。
楽しみにするといい』

『あ、悪魔だ! だ、誰か助け……』

そう言つて鉄人は生徒Aを担ぎあげて歩いて行く。

生徒Aは助けを求めるが誰も助けにはいなかった。

てか、鉄人はそれは洗脳になつてゐるぞ。

すると明久の表情が真剣になった。

「総員退避なんて言うなよ？」

「や、やだな。終夜、僕が言うワケないじゃない？」

俺が先制して言うとう星なのか焦った明久が居た。

これには美波と真希も呆れていた。

巧と冬久は遠くを見ていた。

ああ、こいつらも同じ考えだったか。

「終夜の言う通りよ。アキ、あなたまがりなりにも中堅部隊の部隊長でしょ？」

真っ先に臆病風に吹かれてどうするのよ。

ウチら中堅部隊は、前線の木下たちの援護が任務なのよ？

消耗した木下たちが補給を終えるまでは、ウチ達が前線を支えなきゃならない。

そしてウチ達の背後には、もう本陣であるFクラス教室しかないのよ」

腰に手を当てて明久に説教する美波。

カメラが欲しいって、何を考えてるんだ！俺！！？

それを聞いて明久はハツとなる。

「島田さんゴメン。僕たちが逃げだしたら、戦線が崩壊してイッキに押しこまれちゃう。」

そうなったら絶望的だ」

「ええ。だからウチ達は頑張らないといけないの」

明久がまっすぐ見つめて言うと美波は笑顔で答えた。

「わかったよ、島田さん。とにかく今は、勝利することを目指そう」

「わかったわ。」

明久が美波に言うと美波は頷いた。

「大丈夫ですよ、アキ兄に皆。」

「一対一ではかなわないでしょうけど、多対一に持ち込めば勝機はあるはずですよ」

真希は笑顔で安心させるように言う。

「そうだね、やろう！」

「頑張ろうぜ！」

「俺達の力を見せるんや！」

「吉井隊長、前衛部隊が後退を開始したぞ」

明久と冬久と巧が大声で叫んだ。

すると次の伝令に明久と巧と冬久と美波の頬を、冷や汗が伝う。

「終夜……ウチらガンバったわよね」

俺は、『えっ?!』という文字のような顔になった。

「……だな。くやしいけどここまでのようだ」

だけど二秒で同調した。

「いきなり諦めないでください!」

スパパン!!

真希のハリセンで俺と美波は叩かれていた。

「あれ、横田やん。どないした?」

「兄貴、これ坂本副代表からの伝令です」

巧はいつのまにかいた横田を見て言つと横田は手紙を見ながら言つ。

「『逃げたらクロス』」

「全員突撃しろーっ!」

既に明久は叫びながら戦場に向かって全力ダッシュをしていた。
慌てて冬久と巧と真希と俺も追いかける。

すると、前方から此方に向かって走って来る秀吉を発見した。

「明久と冬久と山崎と終夜、援護に来てくれたんじゃない!」

どこかほっとした感じの秀吉が俺達に言う。

「秀吉、大丈夫？」

「うむ。戦死は免れておるものの、点数はかなり厳しい所まで削られてしまったわい」

明久が聞くと秀吉は頷いて困ったように言う。

「それじゃあ、早いとこ補給を受けてきた方がいい。お前等が戻るまで俺達が何とかしよう」

冬久がそう言うと言秀吉は頷いて

「そうじゃな。せめて一、二教科だけでも受けてくるとしよう。」

言うや否や、秀吉と前線部隊のクラスメイト達が教室に向かって走って行った。

「さて、気合いれて行こうか。アキ兄」

「そうだね、冬久。巧と終夜と真希と島田さんも準備は良い？」

冬久が言うと言明久も頷いて俺と巧を見て聞いた。

「もちろんや」

「同じく」

「はいです!」

「ええ！」

巧と俺と真希と美波は笑顔で頷いた。

俺達は中堅部隊を連れて前線へと走って行った。

「アキ、冬久、終夜、山崎、真希。見て！」

俺達の隣を走る美波が叫ぶ。

「五十嵐先生と布施先生よ！Dクラスの奴ら、化学教師を引っ張ってきたわね！」

見ると二年生化学担当の五十嵐、布施両教諭が渡り廊下にいた。どうやら、Dクラスは短期決戦を挑んで来た様だ。

結構、厄介だな。

新条の妹がいたらなんとかなったはずなのに

「島田さん、冬久、終夜、巧、真希。化学に自信は？」

「アキ兄、俺にあるわけないだろ？」

「俺か？130くらいだな」

「一応100はあるで」

「私は自信ありますよ？」

「全くなし。60点台常連よ」

明久が聞くとたそがれたように冬久が言い、俺もスグに答えて巧はニヤリと笑って言う。

真希と美波もすぐに答えた。

「それでも厳しいかな、五十嵐先生と布施先生には近付かないよう注意しながら

総合科目の学年主任の所に行こう」

明久が困ったように言う。次の指示をした。

俺と巧と真希で行動してもいいが、それでもキツイことには変わらないもんな。

「高橋先生だな？了解だ！」

「同じく了解よ」

「俺も了解や」

「了解しました！」

俺と冬久の言葉が被りながら言い、美波と巧と真希も頷いて言う。

「あつ、そこにいるのはもしや、Fクラスの美波お姉さま！五十嵐先生、こっちに来て下さい！」

「み、美春！？くつ、ぬかったわ」

「やりおるな」

ツインドリルの髪型の少女を見て美波が迂闊そうに言つと巧がノリにのつて言う。

「何者なんですか、二人共!？」

あ、真希がハリセンでツツコミをいれてる。

「行きます! サモン 試獣召喚!」

美春と呼ばれた少女の足下に、幾何学的な魔法陣が現れた。そして、召喚獣が姿を見せる。その姿は、デフォルメされた本人そっくりだ。なぜか、巧に怯えているように見える。

「サモン 試獣召喚!」

美波もつづいて召喚する。足元に幾何学的な魔方陣が現れた。そして召喚獣が姿を見せる。その姿はデフォルメされた本人そっくりだ。武器はサーベル。

「……お姉さまに捨てられて幾数日、美春は、美春はこの瞬間を待ち続けていました!」

「もう! いい加減うちのことは諦めなさい!」

その言葉とともに、美波の召喚獣が打ち掛かる。

「イヤです! お姉さまは、いつまでも……いつまでも、美春のお

姉さまなんです！」

繰り出された一撃を、美春の召喚獣が受け止める。

「来ないで！　ウチは普通に男が好きなの！」

「嘘です！　お姉さまは美春のことを愛しているはずですよ！」

どう見ても美波は本気で嫌がっているはずなのだが、美春にはそう見えないらしい。

「たあああつ！」

「やあああつ！」

すさまじい気迫に周囲の戦闘が一時的に止まる。

「て、やあ」

「負けません！」

何合かの打ち合いがあったが、その全てで美波の召喚獣は打ち負ける。

「まずいな、島田の召喚獣と相手の召喚獣の地力が違いすぎる」

冬久が戦況を見て呟く。

「島田さん！　点数が上の相手に、正面から打ち合っちゃダメだ！」

明久も必死にアドバイスするが、

「そんな、こと、言われても、細かい、動作は、できない、のよ、きやつ!？」

力負けした美波の召喚獣が武器を弾かれる。

「ここまでですっ!」

そのまま倒れた美波の召喚獣に、美春の召喚獣が剣を突きつけた。

二人の召喚獣の頭上に94と53が表示されている。当然、美春が94で美波が53だ。

「さ、お姉さま、勝負はつきました」

「うっ、ほ、補習室は嫌あっ!」

「補習室? …… フフッ。そんな無粋な場所へお姉さまを送り込んだりしませんわ。
さあ、参りましょう」

そう言うと、美春は美波の手を取った。

「な、なにを……」

「この時間ならベッドも空いてますわ」

感極まったように笑う美春と対照的に、美波の顔は真っ青になった。

「ひっ！ しゅ、終夜、フォ、フォローを……」

「邪魔をすれば殺します。誰であろうとも……」

美波は俺に助けを求めているようだ。

だが、美春と呼ばれた少女は俺に殺気をだしている。
勘弁してくれよ！？

「だが、行かないとダメだよな。」

俺が呟いていると

「邪魔者は！ コロスッ！！」

叫びとともに、俺に襲いかかる。

「うお、やば！ 試獣^{サモン}召喚！」

俺が召喚獣を召喚して相手の武器を死神みたいな鎌で防ぐとカウンターの攻撃した。

ちなみに俺の召喚獣もデフォルメされた俺で装備はグローランサーのウェインに似てる。

『Fクラス 秋月終夜 化学 130点 VS Dクラス 清水美春 化学 0点』

その次に点数も表示された。

「そ、そんな……」

召喚獣を一撃で倒された美春は、呆然と立ち尽くした。

「戦死者は、補習!!」

「ハッ?!」

美春は即座に逃げたそうとしたが、あっさり鉄人に捕まる。

「お姉さま！ 美春は諦めませんからね！ 無事に卒業できると思わないでくだ……」

それは想い人への言葉としてはいかなものだろう。
その場に残された全員がそんな顔をしていた。

第八問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

バカテスト 第八問

問 江戸時代（１）をした女性の身代わりになる職業。その職業の名前は（２）である。

（ ）の中身を埋めなさい。

姫路瑞希&吉井真希の答え

（１）おなら

（２）科負比丘尼とがおいびくに

教師のコメント

正解です。

（１）おなら。（２）は、屁負比丘尼へおいびくにあるいは、科負比丘尼とがおいびくにと言います。

人前で放屁するのは良くない、特に女性だとはしたくない事とされてきたんです。身分の高い家には、その家の妻女や娘に付き添って、放屁や過失などを自分の責めとして自分がしたかのようにして恥かきの代りをした役のものがいた。その者の事を屁負比丘尼というんですね。

土屋康太の答え

(1) おな(×)マス(×)——自慰

(2) 女優

教師のコメント

どついう意図でその答えを導き出したかは解りませんが、18禁で
あることは容易に想像できます。
そついうものは、控えてくださいね。

生活指導の西村先生に報告をしておきました。

山崎巧の答え

(1) 借金

(2) 連帯保証人
そしてオレは、——

教師のコメント

そしてあなたは、取り立て屋ですか。

木下秀吉の答え

(1) 粗相(姉上)

(2) 下僕ワシ

教師のコメント

姉上: お姉さんの優子さんでしょうか?

姉弟ですよね!?

坂本雄二の答え

(1) 愛(新条ありす)

(2) 奴隷(俺)

教師のコメント

愛の奴隷……坂本くん、頑張ってください。

吉井明久&吉井冬久の答え

(1) もよ

(2) ムダな身代わり

教師のコメント

便は、自分で行かないと意味ないです。

解ってて代わるんですか!?

島田美波の答え

(1) 小ぶりな胸

(2) パッド

教師のコメント

誰も身代わりになんてなれま……

…確かに代わりになります。答えがかなり力強くかかれていますね。
あなたにとって大切な事——（先生は諸事情により、途中退席しました）

第九問

朋 side

うゝ暇だよ。

開戦の後は、新条君の指令で姬ちゃんと藤堂君と造と一緒に補充試験を受けつつ

本陣で待機させられてるんだよ。

そう言えば、今日は召喚するなって僕と造は学園長に言われてたね。あー、つまんない！

「姫路さん体調は大丈夫ですか？根を詰め過ぎると後々バテちゃいますよ？」

「あつ、はい。平気です。皆さん一生懸命やってくださってますから私も頑張らないと！」

造が姬ちゃんに尋ねると笑顔で返答がきました。

「良い意気込みだね♪でも、無理したら藤堂君が心配するよ？」

僕が笑顔で言う隣にいた藤堂君がこけた。
なんで？

「そつ、そうですか（ポツ）」

あれ、藤堂君をちらちらを見ながらトリップしてる。
姬ちゃん、本当に大丈夫かな？

「あの、レイさん？自分達は本当に前線に出なくていいのでしょうか？」

補充試験を一通り受けつつ休憩をいれてると、造が新条君に近寄って聞きました。

「ああ、造は確かに一度顔をだしたが。戦力のことはまだ知られてないだろ？」

姫路と藤堂と芳乃と造がAクラスの上位成績者なんてことは知らないだろうからな」

怜次君は僕と造を見てニヤリと笑って言う。

あれ、いったけ？

僕と造が元Aクラスだって。

「悪いが、試召戦争の為に康太に調べさせた。だが、お前達の留年の理由や観察処分者になった理由までは調べる気はないから、安心してくれ」

苦笑いして坂本君が言う。

膝にはうつとりしたありすが居るね。

作戦中に何してるのさ、本当に。

「ありがとうございます。坂本く、いや。ゆうさん♪
自分達、協力しますから！」

「ありがとうね！同じく強力するよ！」

造は笑顔で言うので僕も笑顔でお礼を言った。

しばらくしてまた、補充試験を受けていると

「坂本！吉井からの伝言だ！」

「なんだ？脱走ならしばらくと言っておけ。主にチヨキでな」

須川君がいきなり入ってきてそう言ったら坂本君がノートにメモをしなから言っ。

「先生たちに偽情報を流してくれ、と」

怜次君がそれを聞いて考え込んでいると坂本君がメモを須川君に渡した。

なんだろう、造に關してのエマージェンシーを感じるよ

「わかった。かならず成功させよう」

そう言っで須川君が出で行った。

《ピンポンパンポーン》

あ、校内放送だ。

「雄二、お前な」

「いいだろ、別に」

怜次君が呆れながら言っで坂本君は笑っでありすちゃんの頭を撫でている。

《高橋先生、遠藤先生、船越先生、佐藤先生》

四人！？なんか嫌な予感しか感じないよ！！

《月野造君と芳乃朋さんが校舎裏で待っています》

なんてことを言うの！？

佐藤先生は男の先生で高橋先生や遠藤先生並にあるいみしいキャラなんだよ！？

《自分の想いを打ち明けたいのですぐに来てください》

どんな放送なのさ！！

やめてー、恥ずかしすぎるー！

『『月野くん、今行きますねっ！！！！』』

『芳乃さん、今行くからなっ！』

えー、なんで釣れるの！？

こんなことってないよー！！

「ゆーさん！？自分達を売ったのですか？」

「いやいや、協力してくれるんだろ？造。それより逃げなくてもいいのか？」

造が言っていると坂本君はニヤニヤと笑って答えた。

怜次君を見るとものすごく申し訳なさそうにしている。

「と、とにかく逃げるよ！造！」

「そ、そうですね。朋さん！」

僕と造は急いで教室から出て行つた。

いつか、復讐してやるゝ！！

朋side end

真希side

「工藤信也、戦死！」

「西村雄一郎、総合残り40点です！」

「森川が戻ってこない！ やられたか！？」

盛り上がった士気のまま戦うことしばし、残念ながら戦力差の影響が現れはじめてきましたね。

工藤君と森川君が戦死（補習室送り）。

これで、18人いたアキ兄の部隊は残りわずか5人になってしまいました。そろそろ限界ですか。

「明久、冬久、支倉、雨宮、巧、終夜、真希！あと少し持ちこたえろ！」

撤退を考え始めていると、そんな激が飛んできました。

辺りを見回してみると、わたし達よりはるか後方に雄二と雪菜ちゃ

んとうりすがいました。
というか、雪菜ちゃんを背負っているのにあんな遠くからでもはつきりと声が届くなんて。

「援軍だ！ 合流される前に吉井達を全滅させろ！ 面倒な事になるぞ！」

Dクラス前線部隊指揮官の塚本君の指示が聞こえます。
合流前に全滅させられたら、アキ兄達は全員補習室行きです

「西村雄一郎、戦死！」

「五十嵐先生、Dクラス鈴木が召喚を行います！」

「負けるか！ Fクラス田中も行きます」

残り4人。 田中君も捕まりましたか

『化学 Dクラス・鈴木一郎 92点 VS 67点 田中明・Fクラス』

田中君の召喚獣も刀の餌食です。 これで残り3人ですね。

「どんどん行くぞおっ！」

『化学 Dクラス・鈴木一郎 25点 VS 66点 柴崎攻・F
クラス』

『化学 Dクラス・笹島圭吾 99点 VS 41点 柴崎攻・F
クラス』

鈴木君は撃破できましたが、疲労した柴崎君が笹島君にやられてしまいました。

あ、笹島君が明久に向かってきてます。

「吉井明久！ その首級^{くび}もらった！」

「させません！ 試獣^{サモン}召喚」

わたしが言うのと召喚した。デフォルメした姿で格好は天使みたいな格好でした。

ただ、武器は釘バットというものでしたけどね。

「くそ！」

『Fクラス 吉井真希 化学 320点』

V S

『Dクラス 笹島圭吾 化学 58点』

これで一撃で笹島君は倒されましたね。
さて、アキ兄達は？

「ああつ！ 霧島さんのスカートが捲れているっ！」

『何いつ！？』

アキ兄……何が本当にしたいんですか？

というか、才色兼備の彼女のファンは多いようですね。

Fクラスの男子もそうですが、Dクラスの男子とDクラスの女子まで振り返ってますよ

ガシヤアアアアン！

アキ兄は皆さんが後ろを向いている隙に窓を割りました

『な、何だ！？ 何事だ！？』

突然の出来事にその場の全員の注意が更に逸れます

「うわっ！ 佐川君！ そんなものをどうする気だよ！」

佐川君って誰でしたっけ？

というかいらないような気がするんですが。

そうアキ兄が言うのと消火器の安全弁を引き抜きました。

プシャアアツ！

「う、うわっ！ 何だ！？」

「ぺっぺっ！ こりゃ消火器の粉じゃねえか！」

「前が見えない！」

「佐川君、キミは何てことを！」

「佐川！ 何て卑怯な奴なんだ！」

「そうよ、そうよ！ 清々堂々と戦いなさいよ」

バレてないんですか！？ 実在してないのに！！

アキ兄が消火器を天井のスプリンクラー目掛け、おもいつきりブン投げて命中させると

しゅわああああー！

スプリングラーの水滴が辺りを舞う粉を落とし始めました

「待たせたな、吉井！ 五十嵐先生！ Fクラス、近藤吉宗が行きます！」

再びクリアになった視界で勝負を申し込んだのは……雄二君率いるFクラス本隊の一人、近藤君

「^{サモン}試獣召喚！」

『化学 Dクラス・中野健太 43点 VS 91点 近藤吉宗・Fクラス』

「くっ！ ここは退くぞ！ 全員遅れるな！」

「深追いはするな。俺達も明久の部隊を回収したら一旦戻るぞ」

「皆さんお疲れさまです！」

雄二は皆に指示を飛ばしていました。

雪菜ちゃんも笑顔でみんなに言うとなんだかほんわかオーラーが流

れました。

第九問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

バカテスト 第九問

問 江戸時代、農民が武士になるには、どうすればいいか答えなさい。

姫路瑞希 & 吉井真希 & 芳乃朋 & 月野造の答え

『身分をお金で買う』

教師のコメント

『正解です。当時階級をお金で買うことができたんです。金額にして、だいたい20両〜500両。今の値段にして数百万〜数億円と言われています。』

木下秀吉の答え

『一式準備』

教師のコメント

『武士セットですか？ 用意してもなれません。』

坂本雄二&新条ありすの答え

『楊枝を啜える』

教師のコメント

『武士食わねど高楊枝』あれはことわざです。啜えたからといって、武士にはなれません。

吉井明久&吉井冬久の答え

『土下座』

教師のコメント

それでなれても、嬉しくないと思います。

山崎巧の答え

『一揆』

教師のコメント

『暴動を起こした農民です。』

島田美波の答え

『筋トレ』

教師のコメント

『マッチョにしなければなりません。』

秋月終夜の答え

『マラソン』

教師のコメント

マラソンランナーと勘違いしてませんか？

土屋康太の答え

『形振り構わず神頼み』

教師のコメント

『神頼みで武士になれるのなら、神になった人がどれほどいるか…
私も神になっていたでしょう。
それよりも、他にすることなかったんでしょうか？』

第10問（前書き）

楽しんでます様のエレノアさんをちょっと出してみました。

第10問

冬久side

「明久に冬久、よくやったな」

「それじゃあ」

「ああ、補給組はだいぶ回復できたぞ」

「良かった」

「安心したよ」

怜次はニヤリと笑って言う。僕とアキ兄は安心して笑いあう。
つぐみとひばりも安心して呟いた

「あれ、朋ちゃんと月野君は？」

「そういえば、いないね」

ひばりが周りを見て言う。つぐみも気になるのか周りを見て呟いた。
確かにおかしい。喜んでお疲れ様とかあの二人ならいいそうなの
に。

「あの放送は聞いたでしょ？」

「あの放送って」

「まさか…そんなわけないですよね!？」

ありすがにここにこ笑顔で言うといばりが考え込むと真希がなにかに気づいたのか叫んだ。

「その通りだ。あの放送で二人は逃げる為にここから出て行ったのさ」

「「坂本君、どうしてそんな罫を（汗）」」

雄二がにやにやと笑って言うといばりとつぐみは呆れていた。

「協力すると言ってたからな」

「やからって、あんな噂せんでもええと思うんやけど?」

雄二が笑って言うときさきほどまで眠っていた、エレノアさんが呆れたように言う。

ま、僕も同意見だけどね。

「よし、お前等!そろそろDクラス代表の首級を獲りに行くぞ!雄二も出るから安心しろ! みんな続けえっ!」

『おおー!!!』

そんな会話をしていると怜次が鼓舞するようにみんなに伝える。さ、続きを頑張らないとな。いよいよ、最終局面に来た。今なら、帰宅する生徒もいるし、上手く倒せるだろう。

「下校している連中に上手く溶け込め！ 取り囲んで多対1の状況を作るんだ！」

雄二の指令が戦場に響く。

「そつちから、周り込め！ 俺はこいつに数学勝負を申し込む！」

「なら、俺は古典勝負を！」

「日本史で……！」

Dクラスの連中を囲んで、Fクラスのメンバーは倒していく。

冬久side end

造side

何とか撤きましたかね……？ 酷い目に遭いました。

あそこまで鬼気迫る鬼ごっこもそうそうないでしょう。戻ったらゆーさんにお仕置きです。

3時間正座で説教させます。

つと、気づけばちょうどDクラスと我らがFクラスの戦場まで来てましたか。

少し隠れて様子を見ましょう。なるべく見つかるなと言われていまずしね。

よく見るとアキさん達の部隊がやってますね。戦況は良いようですね。

もしかすると自分と朋さんの出番はいらないかもしれませんがね。あ、フユくんの後ろから敵が。

アキさん達は気づいていないようですし、行きましょう！

「「もらった！」」

「させません！Fクラス月野造、召喚します！試獣^{サモン}召喚！」

「同じく！Fクラス芳乃朋、召喚するよ！試獣^{サモン}召喚！」

「造！？何でここに？」

「朋ちゃんまで！？」

おわっ！？め、目眩がします。

そいや、召喚は控えろって言われてましたね。まあ仕方ありませんが、これは予想以上です。

ですが召喚獣はちゃんと現れましたね。よかったよかった。朋さんの方も無事召喚できたみたいですな。

自分と朋さんのデフォルメされた分身と共に、今朝は見せなかった装備と服装です。

ふむ、設定の変更自体は終わっているみたいですな。

見た目は魔法使いを思わせる黒っぽい服装です。

ちなみに朋さんも魔法使いの姿です、自分とは色違いですけど。

てかまんま魔法使いですね。定番の帽子をかぶってますし。
そして戦うための自分達の自慢の武器、それに皆さん驚いています
ね。

何てったって……

「「「ほ、ほうき!?」「」」」

ほら、案の定驚いています。

「造に芳乃さん、どうしてここにいるのか知らないけど、何それ？」

「フユさん、これ知らないんですか？」

学園の庭から神社の境内まで、どこでも使えるこの武器の存在を」

自分は自信満々に笑顔で言いました。

「いや、わかるから！武器じゃないでしょ？」

「というかやつぱりそれが造と芳乃の武器なの!？」」

「はいです。正真正銘、これが自分の武器ですよ?」

「にはは、もちろん、僕のもそうだよ」」

アキさんがツツコミをいれて言うけどこれが自分達の武器なのですよ。

「あつ、わかった仕込み刀とかでしょ?」

「いいえ?そんなもの付いてたら危ないじゃないませんか?」

「そつだよ、痛いじゃん！」

フユさんが言うけど自分達は否定します。

「ただの幕！？僕の木刀の方が強く見えるよ！？」

皆さん哑然としてますね。まあ最初に見たときは自分も流石に驚き
ましたが…

「……やっぱり、FクラスはFクラスよね？」

「そつだな。吉井兄と吉井弟にしろこの子達にしろやっぱり雑魚だ」

「そついえばその子達だっけ？校舎裏で待つてる小学生達は？」

待つて！？小学生は流石に言い過ぎですよ！あなた方は自分達を
どんなふうに見ているのですか？

「ですが、見た目に惑わされると痛い目に遭いますよ…」

「そつだよ！怒ると怖いんだからね！」

「」「」「なっ！？」「」「」

Fクラス 月野造 化学 304点 & Fクラス 芳乃朋 化
学 302点

ようやく出てきた点数に皆さん驚いてますね。

むう、本当なら化学はもう少し点は上のハズですが
ゆーさんのおかげで途中までしか出来なかったじゃありませんか……

「何だあの点数!？」

「あんな奴らいるなんて聞いてないぞ!？」

そりゃ言ってますからね。それじゃ、行きますか？

「アキさんにフユさん！フィールドを一掃します。それから一人ずつ確実に討ち落としましょう」

「「えっ、どうやって?」「」

自分が笑顔で言うつとアキさん達が聞き返してきました。

「見ててください、どりゃあああああああああ」

「いっくよー!!」

自分達は掛け声とともに、一体ずつDクラスの召喚獣をフィールド外に吹き飛ばします。

なんで掛け声かけるのかって？ノリですそんなもの。

そう、自分達のこの筈は攻撃力はほぼ無に等しい代わりに、
風や竜巻を操る能力が付属されています。

一振りで大体3〜5点消費しますが、
他の召喚獣をフィールド外に飛ばせたりとなかなかズル…
ゲフンゲフン、面白い能力です。

召喚獣は召喚フィールド外に飛ばされれば一度消えてしまいます。
再度召喚する前に一体になった召喚獣をアキさんとフユさんに討つ
てもらおう寸法です。
せこいですって？ 作戦ですよ？

Dクラスの生徒さんが慌てている隙に大体をアキさんとフユさんが
仕留めてくれました。
上手いっ！ やっぱ強いですね♪

「……そんなんっ！？」「……」

「戦死者は、補習！」

おおっ、西村先生お早いですね。お疲れさまです。

「ぐっじょぶです、アキさんにフユさん」

「ナイスだね！」

「「GJ！ 造と芳乃さんもね。まさかそんな使い方があるとはね…」」
「

自分達はアキさんとフユさんに近寄って言うと二人は笑顔で答えて

苦笑いしながら呟いた。

「強さは見かけに寄らないってことだね」

「あはは！芳乃さんと造のことだね」

4人でハイタッチしながらアキさんとフユさんと一息入れます。
てか自分達のことってどういう意味ですか？もうツッコみませんよ？
さてとりあえず本隊と合流して体制を整えますか。

「月野と芳乃、お前等も来い！」

「ふえい！？何ですか？自分戦死してませんよ？」

「そっだよ！？」

突然の言葉に自分と朋さんは不思議でなりませんでした。

「大人しく補習を受けろ！お前等は召喚しただけで戦死扱いだ！」

なにその超理論。清々しすぎる！？

「嫌です！理不尽ですよ！？試召戦争中じゃないですかっ！！せんせ許して下さい」

「横暴！！鬼、悪魔ー！！」

「いいから来るんだ！暴れるんじゃない」

自分と朋さんは暴れて逃げようと思いますけど、軽々と担がれて連れていかれてます。

「あゝう、アキさん、後は任せましたあああああ！

ゆーさんのフォローはアキさんがやってくださいね！！

勝って下さいね皆さあああああん！！！！」

「お願いだよー！！僕達の分まで頑張つてねー！！！！」

そして、そのまま自分と朋さんは西村先生に連れていかれました

第10問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

バカテスト 第十問

演劇

シェイクスピアの演劇『ジュリアス・シーザー』において、カエサル最後の言葉として登場する台詞は何でしょう。

木下秀吉&姫路瑞希&支倉ひばり&雨宮つぐみの答え
『ブルータス、お前もか』

教師のコメント
はい、正解です。特に木下君には簡単すぎましたかね。

吉井冬久の答え
『……は。小娘が、もちつと歳とって出直してこい』

教師のコメント
ランサーの最後の台詞ではなく、シェイク『スピア』の最後の台詞をお願いします。

吉井明久の答え
『私を倒しても、第二、第三のシェイクスピアが……』

教師のコメント
ゲームのやりすぎに注意しましょう。

新条ありすの答え

『時間を稼ぐのはかまわないが。別に倒してしまってもかまわないだろ?』

教師のコメント

アーチャーの最後の台詞でもないです。

第11問

明久side

造達が連れていかれた後に声があがった。

『Dクラス塚本を討ち取ったぞ!』

一際大きな声があがり、ますます士気があがる。

「援護に来たぞ! もう大丈夫だ! 皆、落ち着いて取り囲まれなように周囲を見て動け!」

また、よくとおる声が聞こえた。そいつはDクラス代表の平賀だ。

「Dクラス本隊だ、ついに動きだしたぞ!」

「「正念場だね」」

「「そうだね、ひばりにつぐみ、行こう」」

そう言う明久とつぐみと冬久とひばりは飛び出した。

「本隊の半分はFクラス代表の坂本を狙え! 残りは包囲されている者を救出だ!」

平賀の号令の下、あっという間に雄二を中心にたFクラス本体の周りがDクラスメンバーに囲まれる。

「Fクラス、撤退だ！分散して敵を攪乱しつつ後退するんだ！」

「逃がすな！ 個人戦ならそうそう負けはない！ 追いつめる！」

Dクラス代表の声に従い追撃する・・・が、Dクラス本体に隙ができた。

「エレノアさん！」

「おん！向井先生。Fクラス エレノア・アリアドネが近衛隊の四人に総合科目で勝負や」

『え！？』

僕が言うとエレノアさんが頷いて言う

「^{サモン}試獣召喚！」

『し、^{サモン}試獣召喚！！』

【Fクラス	エレノア・アリアドネ	総合科目	1256点	VS
Dクラス	近衛隊X4	334点		

お互い頭上に点数が表示される。

『え！？』

「ほな、さようならやね」

一瞬で召喚獣が切り裂かれた

ちなみにエレノアの魔方陣が展開されて、召喚獣が出現する。容姿は同じで姿はデフォルメされており、姿は某ゲームの青い騎士と同じ姿となる。

「Fクラス吉井明久とFクラス雨宮つぐみがDクラス代表平賀君に現代国語で勝負を挑みます」

「近衛隊がやられるなんて」

僕とつぐみは平賀君に近寄って勝負を挑むと苦々しげに平賀君が呟いた。

あはは、エレノアさんの出現は予想外だったみたいだね。

「勝たせてもらうよ。試獣^{サモン}召喚！」

「ごめんね、これも勝負だから。試獣^{サモン}召喚！」

僕達が召喚すると平賀君も召喚した。頭上に点数が表示される。

【Fクラス 吉井明久 現代国語 99点 & Fクラス 雨宮つぐみ 130点 VS Dクラス 平賀源二 129点】

学ランを着た僕の召喚獣と

うさみにねこしっぱをつけたシルバーメイルの装備姿のつぐみの召喚獣が現れた。

僕の召喚獣の武器は木刀でつぐみは剣なんだよね。

僕とつぐみはそれぞれの得物を使い、振り上げて平賀君の召喚獣を倒した。

こうしてFクラスVS Dクラスの戦争は終結した。

明久side end

冬久side

Dクラス代表 平賀源二 討死

「「「うおおーっ!」」」

その報せを聞いたFクラスの歓喜とDクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような大音響が校舎内を駆け巡った。

「凄えよ! 本当にDクラスに勝てるなんて!」

「これで置や卓袱台ともおさばらだな!」

「坂本雄二サマサマだな!」

「坂本万歳!」

「姫路さん愛しています!」

「姉さん最高!」

「支倉さん結婚して!」

「雨宮を抱きしめたい！」

「真希さんとイチヤイチャしたい！」

「ありすさんと雪菜ちゃんを愛でたい！」

雄二を崇める声が所どころから上がった。

そろそろひばり達に熱烈アタックしている輩を見つけたほうがよさそうだ。

あ、おい。新条と雪菜ちゃんをあげるのはって…遅かったか。

「おい、お前等。帰るぞ」

「ん？もう話は終わったのか？」

「ああ、条件もDクラス代表に言ったしな」

「そっか。なら、帰ろう」

雄二と怜次がこちらに来たので僕が聞くと頷いて答えた。
それを聞いたアキ兄が立ちあがると

「「ちよつと待って、アキ君、フユ君」」

「「ん？どうしたの？」」

僕達をひばりとつぐみが呼びとめる。

「あのね、教室を簡単に掃除したいんだ」

「だから、誰か手伝ってほしいの」

ひばりとつぐみが僕達を見てから周りにいるクラスメイト達を見て伝える。

「僕達は手伝うよ」

「んじゃ、俺も手伝うで」

「巧くんが手伝うならわたしもです!」

僕とアキ兄が言つと巧も手伝う事を申し出たら、真希も手伝つと言つた。

「終夜、ウチらも手伝おう?」

「そうだな」

「瑞希は当然」

「はい!手伝います!」

島田が終夜の袖を掴んで言つと終夜は頷いた。

辰也が姫路さんを見て聞くと笑顔で姫路さんは答えた。

「なら、うちも手伝うで」

エレノアさんも笑顔で言つた。

多分、この教室のことで調べたいことがあるんだろうな。

「「ありがとっ、皆」

ひばりとつぐみは嬉しそうに笑って言う。
やっぱり笑っても可愛いな。

「「お礼に明日デザート作ってくるね」

と、ひばりとつぐみが笑顔で言う

「「「俺たちも手伝おう！！！！」

Fクラスの野郎がキリツとした態度で言う。
こいつらはデザート目当てだろうな。

「掃除してみると、改めてヒドさを感じるな」

そう言って怜次は一つ息をつく。

「あたしもここまでとは……」

「これは酷すぎるよね」

その横で、げっそりとした表情のひばりとつぐみがつぶやいた。

「まさか、半分以上の畳が腐りかけているとは……」

クラス総出で手早く終わらせた方がいいと言う怜次の意見もあつて、
全員で掃除を始めたのだが、開始五分であび叫喚の地獄絵図となつた。

結論から言えば、生半可な清掃ではどうにもならないことが判明し

た。

壁のスキ間はそこかしこにあり、黒板はひび割れ、窓ガラスは割れてないものを探すほうが早かった。

極めつけは、畳だ。

踏んだ感触がおかしいことに気づいたひばりとつぐみが、男子数人の手を借りて畳をめくると。

畳が腐っていたのだ。

画像がグロいので、モザイクまで掛かってしまっている。

これを見たひばりとつぐみは、急遽掃除を断念。全ての畳のチエツクを始めた。

結果は惨憺たるありさまで、腐りはじめ程度のものまで含めると、半分以上の畳が腐っていることが判明した。

「どおりで、すき間やガラスがはまってない窓が多い割には臭うと思っただぜ」

雄二も頭が痛いとはかりに額を押さえて天井を仰ぎ見た。

が、すぐに真剣な表情で周囲を見回す。

「みんな見たか?! この教室はここまでひどいということだ!

これを我慢できるのか?!」

俺たちはたしかに成績不良者の集まりかもしれん。

だが、ここまでの仕打ちには、もうガマンがならない! そうだろ
う?!」

『そうだ! 俺たちだって人間なんだ!』

『こんなのは差別だ! 奴ら(Aクラス)にも味あわせるべきだ!』

『姫路さん、結婚して下さいあ!』

『支倉さんと兩宮さんとチュツチュしたい!』

よし、ひばりとつぐみを述べた奴。
後でo h a n a s iしてやる。

「そのとおりだ！ 俺たちはつかみとるんだ！ 人間にふさわしい
教室を！」

『『『『『おおおー！！！！！』』』』』

Fクラスが雄たけびを上げる。

これほどのありさまは酷いと思っただろうな。
雄二はシスコンでありすに甘いからな。

第11問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7719w/>

ちみっこ団と三つ子と召喚獣

2011年12月1日22時55分発行